宙の果てで考えること

木村怜雄

路傍の石がまた跳ね上がってさ、
いつもの景色を蹴っ飛ばして
空へ空へ、何度も重なって昇っていくんだ
宙を泳ぐみたいに
まるで何かを探してるように。
そのたびに、周りにはいろんな色が集まって
まるで欲望が寄り集まって渦を巻いてるみたいでさ
明日なんてもう、遠い遠い水平線の向こう

夕暮れの光がちらっと見える頃には
全部が逸れて、歪んで、どこまでも自由になる
「そうか、これが悟りってやつかもな」
ふと、そんなことが頭をよぎる
会ったこともない誰かと巡り合って
確かめ合って、全部が解け合っていく
自分なんてものが、もうなくなっていく瞬間ってやつだ

そのうち、わたしも空の高いとこにいるんだろうか
弧の頂上にじっと結ばれた、一本の細い糸みたいに
過去も未来もぜんぶ一瞬に凝縮されて、
その場から動かない、動けない時が止まる瞬間
ただ、「ああ、これが成就なんだな」って
静かな気持ちで、全部がそこにある気がする